

博 士 学 位 論 文 要 約

論 文 題 目： マントヴァ侯ルドヴィーコ・ゴンザーガ治世期における君主の顕彰図
像と信仰

—マンテーニャ作品再解釈に基づく 15 世紀マントヴァ宮廷美術考—

氏 名： 小松原 郁

要 約：

15 世紀北イタリアを代表する画家アンドレア・マンテーニャ (Andrea Mantegna, 1431-1506) は、1450 年代パドヴァでの活躍を経て、1459 年末頃マントヴァに移住した後、1506 年に没するまで宮廷画家としてゴンザーガ家に仕えた。当時のパドヴァにおける好古的趣味、彫刻家ドナテッロの造形表現やフランドルの細密描写をふんだんに吸収し形成された彼の様式は、北イタリアの絵画にルネサンスの颯風をもたらしたと一般的に評価される。

本論の目的は、彼の画業の中でもマントヴァ侯ルドヴィーコ・ゴンザーガ (Ludovico Gonzaga, 1412-78) に仕えた時期の作品について、君主の私的信仰及び他都市のパトロネージ、特にフィレンツェメディチ家との影響関係という観点から再考することによって、マンテーニャ作品の再解釈を行い、当時のマントヴァ宮廷美術の全体像を補完することにある。ルドヴィーコの治世期 (1444-78) は、マンテーニャの画業の円熟期と位置づけられるだけでなく、君主が居城の増改築や聖堂の新築等都市整備に極めて力を入れていた時期でもある。そのため、都市のアイデンティティーの形成期としても極めて重要な期間と重なっており、ルネサンス期のマントヴァ美術の様相を明らかにする上で欠かせない論点となる。また、マントヴァでは、ドナテッロの招聘が叶わなかったことや財政的理由から、彫刻による著名な記念碑を残すことができなかった。その一方でマンテーニャは専属の宮廷画家として、居城の内装から墓碑のデザインに至るまで幅広い仕事を請け負っており、ゴンザーガ家のイメージ戦略の要となっている。そのため、彼の作品を仔細に分析することで、ルドヴィーコのパトロネージの性格を包括的に捉えられるだけでなく、マントヴァの文化的慣習や君主の自己顕彰図像の形成についても、より具体的に明らかにできると考えられる。

15 世紀のイタリアでは、君主制都市国家が乱立し僭主の注文により世俗作品が数多く制作されていた。なかでも人文主義を先導した北イタリアの宮廷では、他所より早い時期から古代への考古学的関心が作品に極めて明瞭に反映されていたため、とりわけ古代美術や思想の受容の形態が常に作品解釈の手掛かりとされてきた。ヴァールブルクによる一連の研究を始めとして、作品の手本となった古代美術の同定や君主及び美術家の古代への関心についての調査研究が様々な形でなされている。しかし、諸研究において古代的要素を取り入れた作品の新奇性が強調され、祝祭や世俗的室内装飾の図像体系に注目が集まる一方で、中世からの図像を色濃く受け継ぎながら発展していく城内礼拝堂の形式や葬礼文化といった信仰と密接に関わる側面については看過されがちであるという問題がある。

マンテーニャの作品を論じるにあたって、まずもって解釈の手掛かりとされてきたのは古代美術や思想の受容形態であった。その一方で、同じマンテーニャが手掛けた作品でも、サン・ジョルジョ城内礼拝堂やサン・フランチェスコ聖堂のための作品など君主の信仰と深く関わる作品については深い議論がなされないままに現在に至っている。

またさらに、北イタリアの美術を論じるにあたって問題になってきた観点のひとつに、トスカナ美術からの影響が挙げられる。マンテーニャの作品については、パドヴァ滞在時について、

ドナテッロなどを介したトスカーナ様式の受容が特に強調されてきた。その一方で、パドヴァを離れて以降の作品については、ことさらにその図像の独創性に注目が集まっている。そのため、マンテーニャはマントヴァ招聘以降もトスカーナなどさまざまな都市に滞在したにも拘らず、マントヴァ期の作品については、滞在先の図像体系からの影響は作品の中に積極的に読み取られてこなかった。

本論では、以上のような問題意識を念頭に15世紀後半のマントヴァを一事例として取り上げ、ルドヴィーコ・ゴンザーガのパトロネージとマンテーニャの画業を再考することによって、当時のマントヴァ宮廷文化の全体像を補完することを試みた。

第一章ではまず、パトロネージの前提となる、マントヴァの政治的・経済的状況を確認しながら、ゴンザーガ家のパトロネージの特徴を概観し、ルドヴィーコによる事績の位置づけ、ひいてはその芸術制作におけるマンテーニャの位置づけを確認した。

第二章では、マンテーニャの到着前からその計画が進められていたサン・ジョルジョ城内礼拝堂に関する問題について取り上げた。現在作品が散逸してしまったこの礼拝堂について、造形的特徴やイコノグラフィの再考、また同時代の邸宅内礼拝堂との比較考察を行いながらその再構成を試みた。具体的にはまず、先行研究において提案されてきた板絵群の配置と帰属に疑義を呈し、現在サン・ジョルジョ城内礼拝堂のための作品と関連付けられている《聖母の死》、ウフィツィの三連祭壇画および版画でのみ現存する受難の場面やリンボのキリストのうち、作品の制作年代や礼拝堂の形式的問題から、1460年から64年に制作された礼拝堂作品に該当するのは《聖母の死》のみであることを確認した。さらにウフィツィの三連祭壇画については、図像の面でトスカーナ美術からの影響が指摘されることから、想定年代を1466年以降に位置づけ、また、右翼と左翼を入れ替えた再構成案を提示した。

第三章では、第二章において1466年以降に位置づけたウフィツィの三連祭壇画と、かつて礼拝堂作品と関連付けられていた受難の場面やリンボのキリストを主題とする作品群の注文契機について再検討した。ウフィツィの三連祭壇画については、イコノグラフィに関する考察からその葬禮的性格を確認し、その上で本作をルドヴィーコの墓廟礼拝堂の整備と関係づけることを試みた。注文者ルドヴィーコは、1460年代以降ゴンザーガ家の墓廟礼拝堂を有するサン・フランチェスコ聖堂の改修に精力を割いており、また、夢のお告げにしたがって新築されたサン・セバステアーノ聖堂が墓廟として構想されていた可能性も示唆されている。自身が眠る墓廟礼拝堂としては、まずもってサン・セバステアーノ聖堂が候補であったと考えられるが、本聖堂は彼の死の直前にもまだ完成の目処が立っていなかった。それゆえに最終的には、当時既にあった墓廟礼拝堂を整備改修するに至り、その新しい祭壇画としてウフィツィの三連祭壇画が準備された可能性を本論では指摘した。

さらに、しばしば城内礼拝堂の内部装飾の姿を留めるものとして関連付けられてきた、受難の場面やリンボのキリストの版画についても再検討を加えた。まず、文書史料の検討から一連の版画作品は1470年から75年に、マンテーニャの監督の下、彼の下絵を元に制作された作品であることが確認された。また、制作についてはゴンザーガ家の統制下にあったと推察されるが、マンテーニャが図像の管理に関してある程度主導権を握っていたことが確認された。さらに、版画作品だけでなく板絵作品としてもたびたび制作されてきたと考えられる《リンボのキリスト》については、現存する《リンボのキリスト》の素描、版画、板絵作品の制作年代を再検討するとともにその制作契機を明らかにすることを試みた。まず、素描と版画については1470年~75年頃に制作された作品であり、現存する板絵については1490年頃の後期の作品と位置づけられることを確認した。さらに、北イタリアやトスカーナに残る同主題の類例作との比較検討を行い、リンボのキリストの主題の作品が主にフランシスコ会と関連する注文で制作されており、特に墓廟礼拝堂や死後の記念碑に用いられていることを明らかにした。さらに、ルドヴィーコが1460年

代から墓廟礼拝堂の整備を考えていたことを踏まえ、1468年に制作された板絵については、死後の霊的救済を願い、個人用の祈祷画として制作された可能性を指摘した。

第四章においては、ゴンザーガ家とメディチ家の政治的関係やマンテーニャのフィレンツェ滞在に着目し、《夫婦の間》の図像を再考した。具体的には、特に謎の多い西壁〈邂逅〉とスパンドルの神話物語群を中心に、副次的モチーフと中心主題との関わりを再検討することを通して、壁画を統合的に再解釈することを試みた。まず、西壁背景の再解釈を通じて壁画全体に通底するコンセプトを確認し、その上でヘラクレス神話とマジの礼拝モチーフについては、その構想における着想源として、フィレンツェの図像、とくにメディチ家のパトロネージからの影響を明らかにした。

以上のように本論では、ルドヴィーコ治世期のマンテーニャ作品である城内の個人礼拝堂、版画、墓廟聖堂関連作品、《リンボのキリスト》板絵、《夫婦の間》について、各作品の制作年代を仔細に検討し位置づけ直すとともに図像の再解釈を行った。

そのように礼拝堂作品と世俗装飾を包括的に捉えることで、ルドヴィーコの信仰心が自己顕彰図像の形成において果たした役割と、世俗装飾の中にもキリスト教図像を溶け込ませながら壮大な図像プログラムを構成するマンテーニャの独自性を浮き彫りにした。また、その構想についてはトスカーナの作品群、とくにメディチ家注文作品の図像体系からの影響を指摘し、一般的にあまり評価されないマンテーニャのフィレンツェ滞在を、君主のイメージ形成に際して大きな役割を果たした重要な出来事であったと再評価するに至った。15世紀後半のマントヴァ宮廷美術は、北イタリア諸宮廷の文化的土壌のみならず、フィレンツェの豊かな図像体系からの刺激、特にメディチ家との直接的な交流を通して培われたものであり、そのパトロネージの方向性は君主の信仰心と深く結びつきながら発展したものであったと結論付ける。